

# ベトナム歩道

連載

ベトナムの街では、早朝と夕方、少し外出して公園などに行くと、思い思いに体を動かす人たちの姿をよくみかける。

マイペースで歩く人、真剣な表情で後ろ向きに歩き続ける人、バーベルを用いて筋肉強化に励む人、公園内に設置された自転車やスキー歩行形式の運動器具で体を動かす人、歩道と車道の境に設置された支柱間に架けられた鉄鎖に足をかけて前後に動かす動作を繰り返す人…さまざまである。街の中心から外れた郊外ではこんなことも。赤交じりの派手なサイクルウエアに身を包んだサイクリストがスポーツ自転車で乗って颯爽と車道を走っていた。乗車中の車両がその自転車を追い抜く際に振り返ってみると、深い皺が顔に刻まれたお爺さんだった。

こうした黙々とメニューに取り組む人ばかりではない。仲間とバドミントン、テニス、卓球、バレー、サッカーを楽しむ人達や集団でエアロバイクに取り組む人達等もいる。

スポーツのなかで一番人気はやはりサッカーではないか。ベトナムの国内リーグだけでなく、プレミアリーグなど世界各地の試合がテレビで放送されている。筆者赴任中（二〇一三〜一五年）には、日本で販売されているプロ野球チップスと似た欧米リーグでプレーするサッカー選手のカード付スナック菓子が売られていた。

本稿執筆中の二〇一六年八月五〜二二日に開かれたリオデジャネイロオリンピック（リオ五輪）では体操、射撃、水泳、重量挙げ等の二三選手がベトナムから参加した（以下、VnExpress, tuổi trẻ online, Tin tức Báo Thanh Niên, Wikipedia tiếng Việt 掲載記事等に基づき記す）。同五輪までに、ベトナムでは二〇〇〇年のシドニーでアテンドー女子五七キロ級のチャ

ン・ヒュウ・ガン選手、二〇〇八年の北京で男子重量挙げ五六キロ級のホアン・アイン・トゥアン選手が共に銀メダルを獲得しており、二〇一五年七月下旬段階で体育・スポーツ総局は、リオ五輪でメダラー二個の獲得を目指すとしていた。

メディアで活躍がよく伝えられ、筆者の印象に残っていた男子射撃のホアン・スアン・ヴィン選手、女子水泳のグエン・ティ・アイン・ヴィン選手もリオ五輪に出場した。ヴィン選手は、一〇メートルエアピストルで史上初めての金メダルをベトナムにもたらし、五〇メートルピストルでも銀メダルを獲得した。アイン・ヴィン選手は二〇メートルと四〇メートル個人メドレー、四〇メートル自由形に出場し、得意とする四〇メートル個人メドレーで自己ベストを二秒近く上回る四分三六秒八五のタイムをマークして九位に入った。決勝進出の八位まであと〇・三一秒という力泳であった。

ヴィン選手は身長一七五センチ、体重七五キロ。一九七四年一〇月六日にハノイ市ソントイで生まれた。弟と腹違いの妹がいる。父は元工兵、実母は工員。幼少時に実母を亡くし、ヴィン選手に士官学校入学を勧めたという継母も既に亡くなった。現在は妻と二人の子供に恵まれている。選手としての経歴を積むのは遅かったとされ、工兵士官学校を一九九四年に卒業後、ハータイ省の工兵三三九旅団で勤務した。一九九八年に軍の射撃大会でトップとなり、一九九九年から競技生活に入った。二年に一度開かれる東南アジア諸国のスポーツの祭典東南アジア競技大会（SEA Games）等で多数のメダルを獲得するほか、二〇一二年のロンドン五輪では一〇メートルエアピストルで九位、五〇メートル

ピストルで四位に入っていた。ヴィン選手は海外での試合も多く、家を留守にしがちであり、妻のファン・フォン・ザンさんも軍で勤務している。そのため、夫妻不在時には、ザンさんの両親が子供達の世話をして家族を支えている。

もう一人のアイン・ヴィン選手は身長一七三センチ、体重五三キロ。一九九六年一月九日に南部メコンデルタの中心地カントーの農村で生まれた。両親と、水泳に取り組む一〇歳離れた弟がいる。アイン・ヴィン選手は三歳の時から自宅近くの水路で泳ぎを習い始め、小学校時から頭角を現した。ほどなく国防体育・スポーツセンターの指導者に認められ、アメリカでの練習機会など国の支援を受けながら努力を積み重ね、実力を磨いてきた。二〇一二年のロンドン五輪にも出場しており、リオ五輪前の二〇一五年六月にシンガポールで開催された第二八回東南アジア競技大会では、金メダル八個、銀メダル一個、銅メダル一個を獲得し、ベトナム国民を歓喜させた。

アイン・ヴィン選手もヴィン選手と同様に厳しい競技生活を過ごしており、家族の待つカントーに帰省できる機会は少ない。

両選手の給与、褒賞について言及する報道も多く、競技以外への社会的関心も高い。貧困削減を課題のひとつとする国の支援を受けての競技生活は、両選手と両選手を支える家族にとって重圧もある。しかし、運動・スポーツを愛好する多くの人達がいるベトナムにあって、両選手のような世界と戦うアスリートの存在は大きな誇りであるに違いない。

（つらもと みのる／アジア経済研究所 東南アジアII研究グループ）